ハイロ通信 From 北区

11月号
NO.005

発行責任者
泊原発の廃炉をめざす札幌北区の会
共同代表　冨田 素實江
N8W3 札幌ｴﾙﾌﾟﾗｻﾞ ﾚﾀｰｹｰｽ No 256
TEL 090-7644-4379

核ごみ処理場の調査応募決定に抗議

10月8日に後志管内寿都町長が核ごみの最終処分場選定の文献調査に応募を決意したことを表明しました。同日、同管内神恵内村長も文献調査に受諾を表明しました。9月8日に村商工会から文献応募の請願が村議会に提出されてから僅か1カ月での決定でした。

核ごみ調査に寿都町が応募
信濃毎日新聞10月10日

神恵内核ごみ処分調査受諾
秋田魁(さきがけ)新聞10月10日

寿都町は8月12日に応募検討を表明して僅か2カ月でした。住民の不安や反対の声があるなか「拙速」との批判が当該内外から響きました。

10月9日には経済産業省幹部が神恵内を訪れ文献調査実施を申し入れ、村長が受諾しました。同省は両町村での事業計画を10月中にも取りまとめ、11月中旬には文献調査を開始する方向を示しています。

応募に待った!の抗議

9月9日　「放射能汚染防止法」を制定する札幌市民の会が経産大臣に「寿都町を巡る抗議と申し入れ」を提出。

14日　生活クラブ生協、道ワーカーズ連絡協、市民ネット北海道の3団体が神恵内村議会長、村議8人に応募しないよう緊急要望書を送付。

16日　後志・檜山管内の「北海道子育て世代会議」が道に応募反対表明求める請願を提出。

17日　廃炉の会が寿都町長に「応募検討断念要請書」提出

19日　「核ごみ問題を道民みんなで考える緊急ミーティング」を開催。参加団体が寿都町・神恵内村長に「声明」を表明。

24日　日本ジャーナリスト会議北海道は応募反対の声明を発表

26日　原発問題全道連絡会、原発問題後志住民の会が神恵内村長、村議会議長に「請願に関する要請」を提出。

医療九条の会・北海道が寿都町長に「応募意向に対する声明」を送付。

28日　脱原発・自然エネルギーをすすめる苫小牧の会が神恵内村議会に「応募請願を採択しないことを求める声明」を送付。

30日　核廃棄物施設誘致に反対する道北連絡協議会が神恵内村に応募しないよう求める声明を送付した。

10月1日　渡島管内8漁協と小樽地区漁協が神恵内村長に抗議文を提出。

（2面に続く）

風声

わずか1，2ヶ月の間に、寿都町だけでなく、神恵内村も、「核のゴミ」の最終処分地選定にむけた文献調査を受け入れを決め、11月中にも調査が始まる状況になっています▼筆者は、11月初旬に、「核燃料サイクルを考える岩内・寿都の旅」に参加しました。観光コースも水産グルメもありましたが、バスの中や、地域の文化センターで、旅に参加された専門家や、寿都町、神恵内村や岩内町で調査受け入れ反対で頑張っておられる人たち（議員や活動家など）のお話を聞くことが主目的の旅でした。調査受け入れに至った経緯や、反対活動の状況などのお話を聞いて、首長や議会、NUMOのやり方がいかに民意を無視したものかが知らされ、住民の分断さえも図られているのではないかと感じました。この問題は、2つの町村だけではない、全道、全国の問題であり、お互いの運動の交流と協同がもっともっと必要だということを改めて理解できた旅でした▼ゴミの地層処分技術は、世界中でのどこの国でも確立していません。地盤強固で安定していると考えられ地下処分が行われているフィンランドの岩盤も10万年もの安全の保障はありません。このまま原発政策をすすめる限り、核のゴミは溜まる一方です。どう処分すればいいか、まだ、人類は、回答を持っていません。安全な処分技術の目途がつくまで、人間の目が届き、きちんと監視できるように原発敷地などで地上保管することが必要でしょう。どう処理すればいいのかを決めるためには、何よりも原発の稼働・再稼働、核燃料サイクル政策を、即時中止することが大前提です。今ある核ゴミの処分については、専門的な研究、技術開発、及び、民主的議論などが、日本だけでなく、国際的な協力・共同のもとにすすめていくことが必要です▼「岩内・寿都の旅」では、岩内町野束の丘にある「三行の碑」にも寄りました。岩内を舞台にした小説「飢餓海峡」を書いた水上勉と、長野県上田市に戦没画学生を慰霊する美術館「無言館」を建てた窪島誠一郎父子の3行の言葉が刻まれています。『「核」を　絵筆で塗りつぶせ　ペンで書きあらためよ』と。非常に感銘を受けました。

（福地保馬）

核ごみ処理場の文献応募調査決定に抗議（1面からの続き）

10月1日　Ｓｈｕｔ泊主催で伴英幸氏（原子力資料情報室共同代表）の「核ゴミ地層処分」講演会を開催。（札幌）　2日　同内容で寿都町で開催。　3日　岩内町で開催。

4日「やめて！核ごみ捨て場スタンディング大通り」脱原発女の会主催　賛同36団体　150人参加

5日　後志（仁木、共和、倶知安、蘭越町）・原発とエネルギーを考える会が神恵内村長、議長、議員７人に「文献応募しない要請書」提出。

10日　苫小牧市津田孝氏が、寿都町・神恵内村長宛てに「文献応募撤回」要請書提出。

神恵内村が文献調査を受諾表明。

12日　脱原発・自然エネルギーをすすめる苫小牧の会が「文献応募撤回求める声明」を発表。

「道庁前スタンディング」主催　脱原発をめざす女たちの会・北海道賛同39団体

17日　原発問題後志住民の会の呼びかけで、岩内町で「核の最終処分問題学習会」開催

18日　道平和運動フォーラム実行委主催「ＳＴＯＰ再稼働！さようなら原発北海道集会」に約４００人参加。

22日　核廃棄物施設誘致に反対する道北連絡協議会、生活クラブ等、５団体が道に幌延深地層研究５００ｍ掘削反対の申し入れ書を提出。

23日「こどもたちに核のゴミのない寿都町を！町民の会」が町長に応募住民投票条例の直接請求２１７人分提出。

25日　北海道平和運動フォーラムなどの主催で、シンポジウム「核のゴミを受け入れてもいいの」を札幌かでる27で開催、２７０人参加

29日　日本科学者会議北海道支部、「文献調査の撤回を求める」声明を発表

11月1日　高知県東洋町の澤山安太郎元町長と上田文雄元札幌市長の対談・緊急集会　Ｓｈｕｔ泊主催

3日「子どもたちに核のゴミのない寿都を！町民の会」主催で小泉純一郎元首相が「原発ゼロ」講演開催。

10/18　大通公園「さようなら原発北海道集会」　北海道新聞

『再稼働させない連絡会』開かれる
名称に『核ゴミを持ち込ませない』を追加

９月19日、『泊原発を再稼働させない北海道連絡会』が札幌市内で開かれ、引き続き、『寿都町・神恵内村　核ごみ問題を道民みんなで考える緊急ミーティング』を開催。オンラインを含め参加が28団体、会場出席が25人でした。

『再稼働させない連絡会』では、知事宛の「再稼働を認めない道民署名」完成版を確認、３月末に一次集約を決めました。元福井地裁裁判長の樋口英明氏の「わたしが大飯原発を止めた理由」と題した講演会を、11／28（土）午後２時半から教文会館で行う事を確認しました。

寿都町・神恵内村の核ゴミ処理場の文献応募を巡って、会の名称を「泊原発を再稼働させない・核ゴミを持ち込ませない北海道連絡会」と改名することを討議し、10月10日の幹事会で決定しました。

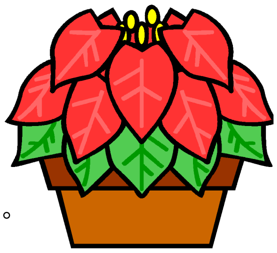
「寿都町・神恵内村　核ごみ問題を道民みんなで考える緊急ミーティング」では、後志地域団体や寿都町の幸坂順子町議が参加され、各団体の取り組み報告がありました。

特に、幸阪議員からは、道内外から反対運動への激励や差し入れが届き、感動したこと。当初反対だった、町民、商工会、漁業組合の中から賛成の声が出てきていること。

まさに町全体が苦しんでいる様子を報告されました。

参加者全員で反対運動を強めていくことが確認されました。

「ハイロ通信」に嬉しい便り
マシオン恵美香さん
（釧路市　ベクレルフリー北海道代表　廃炉の会世話人）



通信を拝見しました。
とても美しい紙面です。
有能な編集者がいらっしゃるのですね。
タイムリーな話題と懐かしい話題の両方がありました。

私は２つの訴訟の原告でした。森山事務局長のお顔も懐かしかったです。
最後に会った日に教育文化会館から地下鉄駅まで腕を組んで一緒にゆっくり歩いたことを思い出しました。泊原発の反対運動からですから1986年からずっと活動でときどきお目にかかっていました。思えば、1989年の臨時道議会もご一緒していました。
森山さんがご存命だったら、幌延、寿都、神恵内について、どのようにおっしゃったでしょう・・・・

今朝（9/11）の道新朝刊一面は、寿都に続き神恵内も・・・というショックな報道。

皆さんはほとんど幌延と決めこんでいた核ごみ最終処分地選定問題は道内数力所、道外にも沿岸自治体に入っていたNUMO地域交流課が文献調査へ進むことで、どこに絞り込まれるかわからなくなっていき、住民の堪え性がもたなくなったところに、ある日、急にすっと決まるように思います。

最終処分なんか、ガラス固化体もできやしないし、坑道もないのにできやしない。
それよりも老朽原発の冷却用プール内にある使用済核燃料が今日のたったいまも心配です。
どっちみち中間貯蔵とか最終処分なんかは遠い将来なので、原発敷地内に安全な形で仮置できるよう措置すべきと思います。

3・11から9年　シリーズ【福島の今を告発する】③

これ以上放射能を海に流さないで！

これ以上海を汚すな！市民会議

共同代表　織田千代

原発事故後、私は「復興」という言葉の使われ方にとても違和感を感じています。

事故後になされたことといえば、まず放射能の流れを知るためのシステム「スピーディ」はやめてしまう、モニタリングポストも減らそうとしました。挙げ句の果てには除染土の再利用まで始めています。最近のニュースによると、福島県の飯舘村では、除染土の上に覆土もせずに野菜を植える実験がなされるという事まで紹介されていました。このようなニュースがどんどん増えてきている様に感じます。

目の前からタンクなくせば

あの原発事故が起きた時、私は豊かな美しい色に溢れていた福島の、カラーだった世界が一瞬にして白黒の世界になった様に感じました。しかし今、国はそこに無理矢理上から色を乗せて「ほら以前と同じ世界に暮らせているでしょう、何も心配はありません。」と言っているように見えます。

汚染水を溜めたタンクを目の前からなくせば、事故前の生活に戻れると本当に納得し、故郷の復興が叶うと本心から考えている方はどの位いるのでしょう。もしかしたら、そこに発生する補償や仕事がなければ、やっていけないという方もいるでしょう。でも、この9年半、本当に苦労して除染作業をしたり、学校や保育園や公園の敷地の放射線量を測ったり、水や土や食品を測定して、少しずつ安心を確認しながら暮してきた人たちは「もう二度とあんな被害は受けたくない」という方がほとんどだと思います。 いま、漁業者も、農産物を作る人も、それを提供するお店や観光業も、何よりそれを本当に美味しくいただく喜びを知っている生活者が声をあげています。

資源エネルギー庁との意見交換会

先日、市民側からの企画でようやく実現した「資源エネルギー庁との意見交換会」でも、「正しい情報を伝えて！もっともっと市民の意見に耳を傾けて！」そして「これ以上放射能を海に流さないで！」の声があがりました。全国からパブコメも400以上、署名は23万筆になろうとしています。

政府はこの声にどう答えて、どう行動していくのでしょう。**注①**

心配だ、という生活者の声に「風評被害をおこす者」というレッテルを貼り、そのおかげで復興が進まないのです、という論理にすり替えようとするやり方はいつまで続くのでしょう。アンダーコントロール発言をした安倍総理が辞任して、何か変わるでしょうか。逆方向への復興が加速しないでしょうか。**注②**

「人の作った基準、それ以下だからといって、海に汚染水を流さないで下さい」それは、原発事故の拡大がこれからも続く、ということを意味します。事故の影響の歯止めが無くなる、ということだと思います。

写真提供　織田 千代 氏

本物の復興を望み、廃炉を目指すのなら、まず、これだけ過酷で多方面に関わる重大な事故が起きたことをしっかり認識し、その影響が、もうこれ以上、少しでも、広がらないような方向での丁寧な努力をして見せてほしいのです。

失ったものは山のようにあるけれどその中の大きなひとつは、政府への信頼です。そこが信じられればこそ、大きな安心が得られるし、皆が同じ方向を向いて前にも進めると思います。

国民に説明しない政府に不安

（11月1日現在）

注①私たちの会から出された要請書（一般市民向けの公聴会をもっと開くこと、汚染水を海洋放出しないこと）への返事は、呆れるほどの官僚的曖昧さで、「引き続き関係者のご意見をお伺いした上で、処理水の取扱いについて、責任をもって結論を出してまいります」という、素っ気なく意味不明なものでした。

[これ以上海を汚すな！市民会議」
facebook トップ写真

注②菅氏が総理になり、復興大臣の平沢氏も、決まり事のように福島に来て、「処理水の問題は、責任を持って進めて行きたい」と、同じ言葉を繰り返しています。国民に説明せずに物事を進めるのが「得意技」のような内閣が出来上がり、不安は募るばかりです。

今、核のゴミ処分場について、北海道の寿都町の町長が名乗りをあげたニュースが大きく騒がれていますが、どこかで最終処分を受け入れてしまうということは、放射能汚染されたものは目の前から無くし、そこへ持っていけば良い、という論理で廃炉の最終形が決まり、それに沿った事業に拍車がかかる事になるのでは?と私は危惧します。

原発事故の起きた福島は勿論、日本各地にある核施設、その周りに暮らす私たちは、「どうか、やめて下さい」の声を出し続けるしかありません。

「隠蔽され続ける内部被曝の恐ろしさ」

北海道がんセンター
名誉院長　西尾　正道

原爆開発の過程で内部被曝が最も深刻な健康被害をもたらすことを米国は把握しており１９４３年から軍事機密扱いとされていた。放射線の健康被害に関する報告や勧告を出している国際放射線防護委員会（ＩＣＲＰ）は核兵器製造や原子力政策を推進する立場で活動している民間組織である。

ほぼ放射線の正確な測定が可能となった１９２８年に医学利用における安全管理を目的に「国際Ｘ線およびラジウム防護委員会」が設立されたが、戦後にマンハッタン計画に関わっていた人達が合流して１９５０年にＩＣＲＰが設立された。こうした経緯から、放射線の健康管理は、医学利用よりも原子力政策を推進するための報告と勧告が主な目的となった。そのため、ＩＣＲＰに組織内で第１委員会が「外部放射線被曝限度に関する委員会」、第２委員会が「内部放射線被曝に関する委員会」であったが、１９５２年には内部放射線被曝に関する第２委員会の審議を打ち切った。内部被曝に関する深刻な報告書が出されると困るからである。最も深刻な内部被ばくを隠蔽する歴史は１９５２年から国際的に始まっていたのである。ＩＣＲＰ設立当初の内部被曝線量委員会の委員長で、放射線衛生学の父と言われたＫ・Ｚ・モーガは、『原子力開発の光と影—核開発者の証言』（２００３年刊、昭和堂：１５３頁）において、『ＩＣＲＰは、原子力産業界の支配から自由ではない。原発事業を保持することを重要な目的とし、本来の崇高な立場を失いつつある。ＩＣＲＰはα線とβ線による内部被曝を排除した。その理由は人間の命と健康より産業界と軍の経費節減要求を優先させたため』と記している。換言すれば、原発作業員の安全を考慮すると原子炉の運転はできなくなるからなのである。

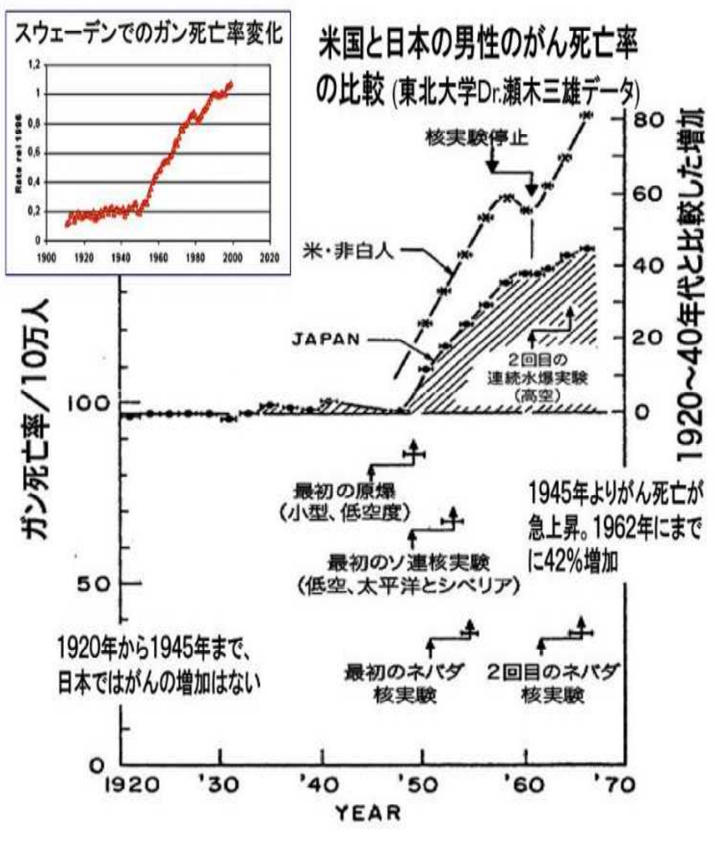
こうした歴史的経過により、内部被曝に関しては隠蔽・軽視されたＩＣＲＰの報告や勧告の内容が、我国をはじめとして諸外国の放射線管理に関する国内法に取り入れられ、医学教科書もＩＣＲＰの内容で書かれており、世界中の人々がＩＣＲＰの催眠術にかけられている状態なのである。

嘘も百万遍言えば本当になる手法であり、科学の内容も目的や立場によって作られるものなのである。いかにも一見科学的な体裁をした疑似科学的物語を鵜呑みにして議論しているのである。ＩＣＲＰの最大のインチキは、放射線の人体影響は色々な被ばく形態で影響度は異なりますが、全身の影響の指標として実効線量:シーベルト（Sv）という単位に換算して議論していることです。

しかし、単純に考えても放射線の影響は基本的に被ばくした細胞や部位は影響を受けるが、被ばくしていない細胞や部位は影響を受けないのです。すなわち被ばくのエネルギー分布が考慮されていません。また急性に被ばくするか慢性的被ばくかで違います。たとえて言えば１升酒を一晩で飲むか、一年で飲むかでは酔い方は違います。また、全身の被ばくか局所的被ばくかでも違います。がん治療の病巣には致死線量と言われる10倍の線量を照射して治療しますが、限局したがん病巣にだけ照射するので、死ぬことはありません。さらに外から一過性に被ばくする外部被ばくと連続的に被ばくし続ける内部被ばくでは影響が異なります。誰が考えてもおかしいと思いませんか。　外部被ばくと内部被ばくをたとえれば、外部被ばくとは薪ストーブに近寄って暖を取り温まること、内部被ばくとは薪ストーブの中で燃え盛っている小紛を口から入れることです。

（５面に続く）

資料1　戦前・戦後のがん罹患者数の推移



「隠蔽され続ける内部被曝の恐ろしさ」（４面からの続き）

どちらが危険化は猿でもわかりますが、ＩＣＲＰの催眠術にかかっている人間には理解できないのです。内部被ばくは放射性物質を呼吸や食品から摂取したり、開放創の傷口などから体内に入って、放射性物質の限局した小範囲にだけ放射線が当たります。

人体に取り込まれた放射性物質から微量であっても照射され続けるという極めて長期的・連続的に放射線を浴び続けることとなり、人体への影響はより強いものとなります。したがって医療でＣＴ撮影では撮影部位だけ一瞬被曝するのに数ｍSvであるなどと言って比較して語るのは 適切な比較ではなく、誤魔化しなのです。また画像診断や放射線治療では患者に利益をもたらすものであり、被ばくするのは撮影部位や治療部位だけの局所被ばくであり、当該部位以外の被ばくは極微量な散乱線である。内部被ばくを伴う放射性物質からの被ばくとは全く異なるものであり、線量を比較すること自体が間違いなのである。

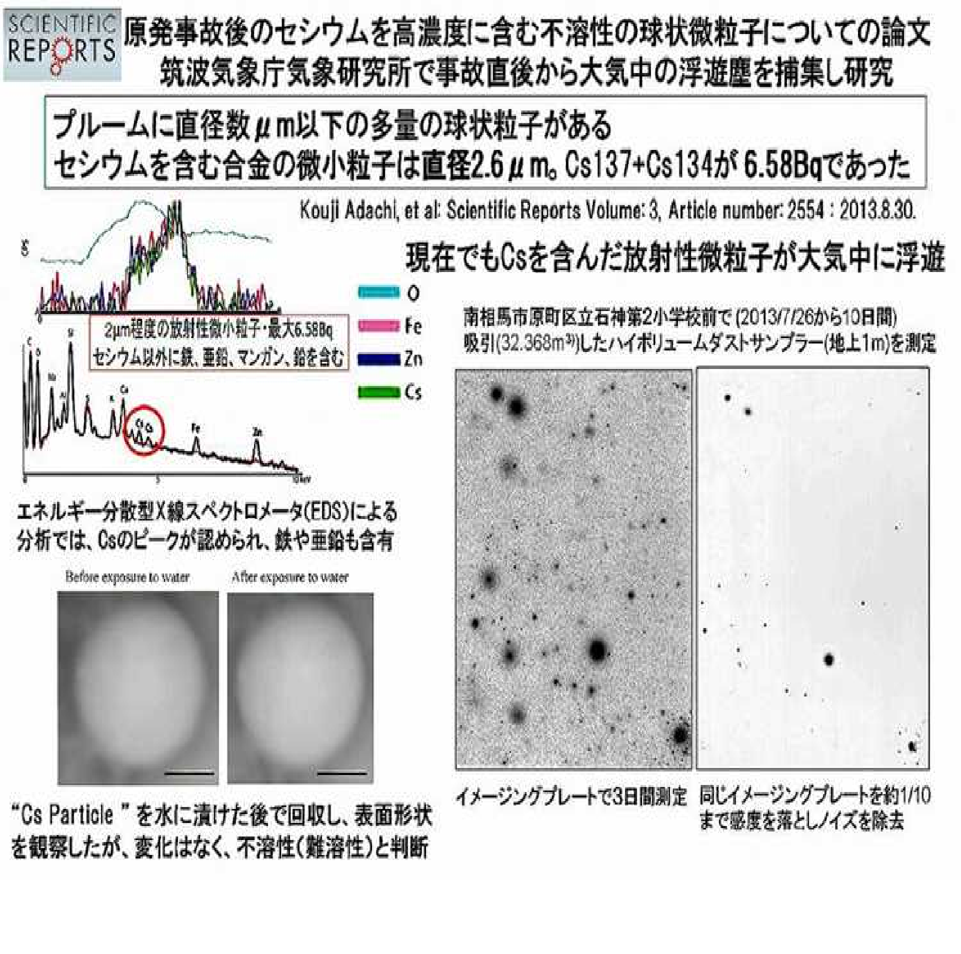
さらに、一過性に放射線を浴びる外部被ばくと、体内で放射線を出し続ける内部被ばくの影響を全く科学的根拠もなく、実証もされていない預託実効線量係数という内部被ばく線量の換算係数をでっちあげて、「外部被ばくも内部被ばくも線量が同じであれば人体影響は同等と考える」とＩＣＲＰは勝手に決めているので、内部被ばくは極めて極少化した数値とする計算上の操作をして、影響を軽視するようにしているのである。

この内部被ばくの線量計算のインチキをたとえると、目薬は２～３滴でも眼に滴下するので、点眼した眼にだけ効果も副作用も見られるのであるが、その目薬２～３滴を口から投与して、全身投与量に換算して全身の影響を評価するSvというインチキ単位で内部被ばくも線量評価を行っているのである。

戦後の核実験でセシウムやストロンチウムなどの長半減期核種の放射性物質が最終的には海に行き、魚介類などを通じて人間の体内にも入りました。そのため、１９５０年頃より世界中でがん罹患者が増加しています。資料１は厚生省に勤務していた時に母子手帳の制度を作った瀬木三雄氏が東北大学の公衆衛生学教授となり研究調査して発表したものである。日米もスエーデンでもがん罹患者の増加が見られます。これは放射線微粒子として体内に取り込んだためと考えられます。核実験で外部被ばくを受けたためではなく、核分裂で発生した放射性物質の取り込みによる内部被ばくが原因なのです。福島原発事故において、１号機は水素爆発でしたが、３号機は核爆発でした。そのため、放射性微粒子がプルームにのって全国に飛散しました。事故後の３月15日に筑波市の気象研究所がＰＭ2.5を測定していたら、大気中に浮遊しているセシウムを含んだ微粒子を検出しました。この微粒子をしばらく水に漬けて取りだしても全然形が変わらないので、水に溶けない不溶性の微粒子だとわかっています。私は南相馬市の某市会議員に電話して、小学校の前のダストサンプルを送って貰って、それをＸ線フィルムに重ねて現像したら、大小さまざまの沢山の微粒子が映し出されていました。事故後２年以上経過していましたが、こうしたセシウムの放射性微粒子が空気中に浮遊しており、肺に取り込まれたりしているのです。そして微粒子のサイズによっては血中に入るのです。放射性微粒子の資料２に示します。

（６面に続く）

資料2　内部被ばくをもたらす放射性微粒子



「隠蔽され続ける内部被曝の恐ろしさ」　（5面からの続き）

なお、岩波書店の『科学』という雑誌の２０１６年８月号に、この年の３月に退職した広島大学の放射線医科学研究所という御用学者の巣窟のような施設で、放射線の人体影響を研究していた大瀧慈氏が論文を載せています。この論文のタイトルが、「広島原爆被爆者における健康障害の主要因は放射性微粒子である」というものです。やっと放射性微粒子による内部被曝が実は深刻な健康被害をもたらすことに気づいてくれたのです。この論文を読んで、私は大瀧先生に「70年経ってやっと分かってくれましたか!!!」とメールしたくらいです。

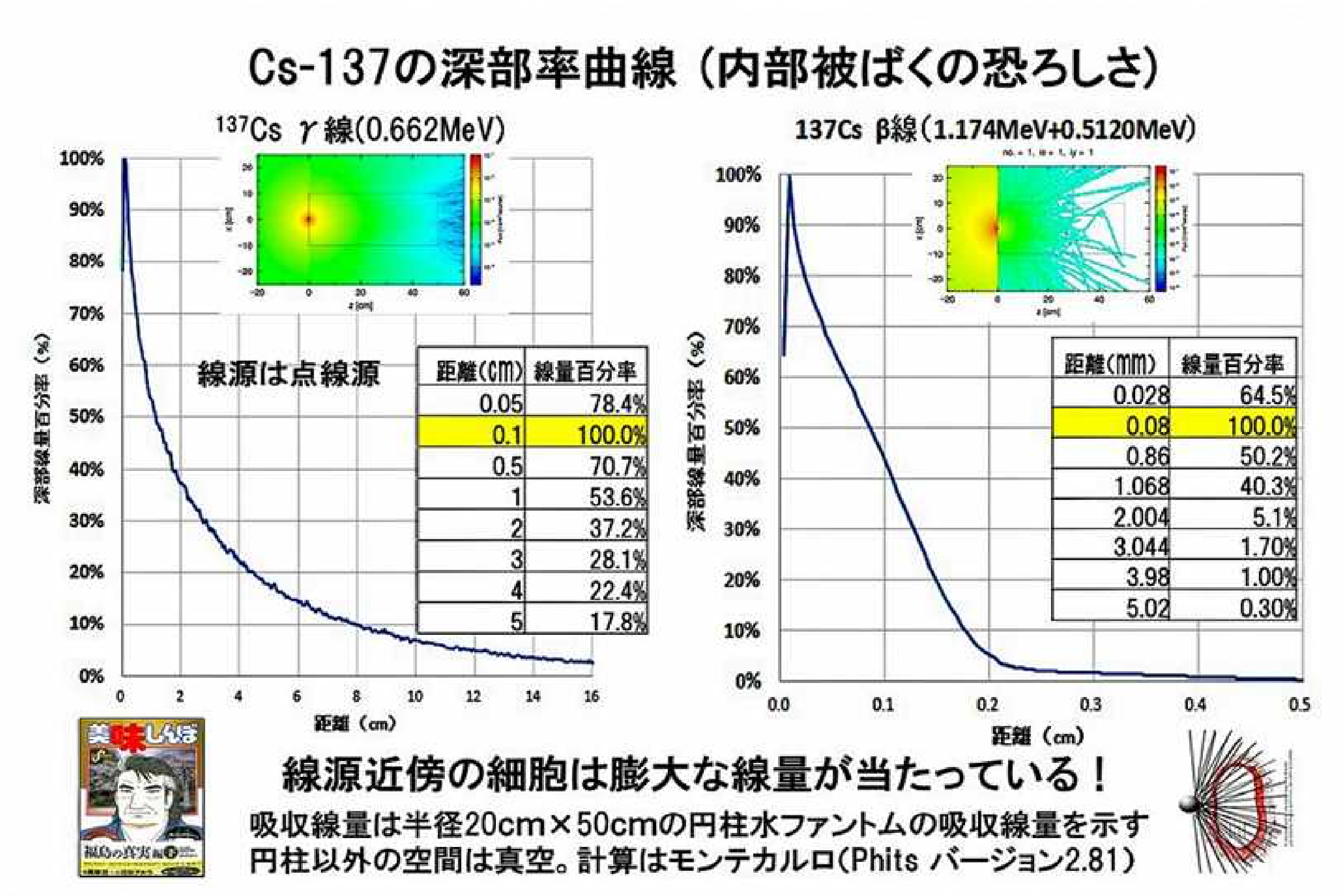
内部被ばくがより危険なのは被ばくしているエネルギー分布によるものです。放射性微粒子に接している細胞は膨大な線量が当たっているからです。資料３にセシウム(Cs-１３７)の水中での深部率曲線を示しますが、ガンマー線では微粒子から１㎜離れた部位を１００％とすると、１㎝のところでは５３．６％となり、ほぼ半減しています。またCs-１３７はβ線も出しますが、０．０８㎜を１００％とすると２㎜離れれば５．１％となります。

このように線源からの距離で被曝線量は大きく異なりますが、それを臓器平均化線量として換算する等価線量(Sv)とか、全身化換算して実効線量(Sv)という単位で被曝影響を議論していることがインチキなのです。私が行ってきたCs-１３７などの線源を使用した内部被ばくを利用した治療では線源から５㎜離れた地点での吸収線量(Gy)を計算してがん治療を行っていました。医学ではBqかGyしか使用しません。インチキなSvという単位は全く使用できませんし、使用していません。

放射線というのは必ず中性子線以外はプラスかマイナスに荷電されています。空気中の埃などと一緒になって小さな微粒子になります。今問題になっているコロナウィルスは10ナノメートル(nm)です。1ミクロン(μm)というのは1㎜の1，000分の1です。nmは1μmの千分の一単位ですから、100nmとは1万分の1㎜です。このサイズから粘膜も血管壁も細胞膜も通りますので、血中に入ります。だから放射性微粒子がこのサイズだったら身体の中に入ってしまいますし、胎盤を通じて胎児にも影響を与えるのです。こうした知識があれば、空気中に浮遊している放射性微粒子が鼻粘膜に付着すれば鼻血が出ることも理解できるでしょう。風評被害ではなく、実害なのです。

（了）

資料3　セシウムCs-137の深部率曲線



故 森山 軍治郎 氏（元 泊原発の廃炉をめざす会 事務局長）遺稿　　連載（５）

泊原発の廃炉をめざす会の運動と北電

各地ですすむ脱原発の運動「地域連絡会」の発足を確認

３か月ごとの口頭弁論はいつも平日のことで、遠方からの傍聴参加はほとんど不可能だった。すべては札幌中心に動いていた。原告にせよ賛同人にせよ、廃炉の会の会員は札幌圏の人たちが多かったが、全道に散らばっていた。それぞれの地域での活動がのぞまれた。帯広を中心にした十勝では当初から独自活動をしており、全道集会や大規模デモには大型バスで札幌にきていた。が、地元で定期的に「さようなら原発全道１００万人署名」運動を展開し、講演とコンサートの企画を進めていた。

２０１５年６月の総会に代わる活動報告会では正式に「地域連絡会」の発足が確認された。僕が属する空知では「泊原発廃炉の会・そらち」がすでに活動を開始していた。原子に関する基本的な勉強会、自然農法や自然エネルギーの実験的体験、建設中の大間原発の真下にある【あさこはうす（原発敷地内に土地を所有している故熊谷あさ子さんが土地を死守して建てた家で、現在は娘さんの小笠原厚子さんが住んでいる）】への「そらち」での訪問といった独自の活動をやってきた。

活動報告会では岩内からの現状が語られ、壮瞥町では隣接する伊達市の原告たちと小さな集まりや署名活動についての話があった。釧路では市川弁護団長・共同代表を呼んでの集会が開催されていた。あちこちの地域からの報告が続いた。運動が確実に広がっていた。

札幌の各区・周辺地域に「地域連絡会」を

が、原告や賛同人が集中している札幌市とその周辺地域での活動がない。というよりも、「廃炉の会」そのものへの参加ができたからないのかもしれない。それにしても地域活動というものがあるはずだ。札幌市10区と周辺市町別の会員名簿が点検される。きめ細やかな地域活動が準備されればじめている。今年（２０１６年）の「３・11メモリアル集会」には立命館大の大島堅一氏の講演が企画されている。演題は「原発のコストと経済」だ。

４月からは電力販売が完全自由化される。原発の電力は選ばない。できれば再生可能エネルギーの電力がほしい。

活動報告

北区の会

北区の会は5月7日に発足しました。早速、道知事宛の「再稼働をみとめないで」と「核ゴミを持ち込まないで」の署名活動を週3回街頭で実施し、6月末で360筆、290筆集まりました。今後も継続して取り組みます。皆さんの参加をお願いします。（冨田素實江）

「北区の会」発足の報告
HAIROニュース　No.19

「大島堅一氏講演会」パネルトーク

原発推進勢力の攻勢 次々と容認される再稼働

とはいえ、最近の動きは脱原発派に有利なことばかりではない。すでに川内原発が再稼働をはじめている。鹿児島県知事が火山活動などを無視して再稼働に同意してしまったのだ。伊方原発に関しても愛媛県知事は再稼働に同意している。ここでこそ、狭い佐田岬半島にあって、原発よりも先に住む住民には、いざというときに避難するすべがないのだ。

福井地裁判決でも、高浜原発３・４号機の再稼働が容認され、すでに仮処分で差し止めが決まっていたのが反故にされた。すべて、原子力規制委員会が新基準を満たしたと判断したからだ。田中委員長は規制委員会の基準がパスしたからといって安全が証明されたわけではない、といっているが国の方針が再稼働なのだ。電力会社は原発という資産でより大きな利益がほしい。

これ以上に「核ゴミ」をだしていいわけがない。原発の負担は電力購入者と納税者の国民だ。

北電でも危ない動きが見えはじめてきた。北電が主張してきた基準値震動は５５０ガルだった。実際に日本で起きてきた地震では４０００ガルというものもあった。とても現実的な数字とはいえない５５０ガルだが、規制委員会はこれを６２０ガルに引き上げれば、大筋で了承できると発表した。泊沖の活断層の存在はどうなったのか。

泊原発３号機の再稼働にも規制委員会はゴー・サインをだしてしまいそうだ。地域の合意が最後の砦になるはずだが、周辺４か町村の首長はみんな再稼働賛成派だ。やはり知事の判断が決定的なのだ。なんとしても知事に認めさせてはならない。

裁判にしても、これまで無気力にさえ見えた北電側も一連の動きの中で俄然攻撃的になるだろう。初期の規制委員会とは違って、大本の判断がおかしくなっている。「廃炉の会」では規制委員会自体のウオッチングが必要になっている。

当然のことだが、以上が「廃炉の会」運動の全般なのではない。なお、口頭弁論関係の資料は「廃炉の会」機関紙『ＨＡＩＲＯニュース』（１～16号）による。

（２０１６年２月４日）（完）

※中見出しは、編集局で挿入しました。

次号から故森山氏「泊原発裁判風景－しろうと裁判のはじまり」（１９９３年）を連載します。

「ハイロ通信4号」の記事内容に質問と意見がありました。
「会員紹介欄での『太陽に突っ込ませる』は無責任でないのか？」

【森田雄一氏の手紙全文】

ハイロ通信9月号No.004お届け頂き読ませていただきました。

トップ記事にありましたように、寿都町が核のゴミの文献調査受託の方向が出され、その後神恵内村からも村商工会からの請願を受け入れる形で応募に踏み切りました。

風声欄で福地先生の署名記事が掲載されていますが、「核のゴミをどのように処理するべきか」については触れられてありません。私は会報記事の中で紹介されている菅直人元首相が参加された講演会をはじめいくつかの学習会・講演会に参加してきましたが、いずれも核のゴミ処理について見解はありません。北星大学で開催された学習会で、私から原発稼働には反対でなるべく早く廃炉にするよう望むが、国として核のゴミの処理を決めないまま原発稼働に踏み切ったことをまず謝罪し現在計画中の原発を含めすべての原発の廃止方向を示したうえで「核のゴミをどのように処理すべきか」について国民的な議論を進めるべきではないかとの質問をしましたが、明解な回答はありませんでした。

今回寿都町・神恵内村の住民の中に泊原発から出たゴミは地元で処理すべきではとの声もありましたが、この論法で原発毎に全国にゴミ処理場を作るべきとは思いませんし、安全性や風評被害の拡大、処理場建設の膨大な費用を考えるとあり得ない話と思います。地域住民も鼻先にニンジンをぶら下げ過疎の町にゆさぶりをかける国の方針の犠牲者なのかとも思います。

核のゴミの処理について、安全に処理する方法が見つかるまでこれまで通り地上で保管しておいたほうが良いとの意見の人もいますが、自然災害でもろくも事故を起こした福島の例をみるまでもなくそのほうが心配とも思います。ガラス固体化し地下深くに埋める現方針にも賛成しかねますが、地上に置いたままよりは安全性が高いのではと悩ましいことです。

これらのことを踏まえたうえであえて質問させていただきます。

ハイロの会としてごみの処理をどうすべきか、これから発行されるであろうハイロ通信に掲載してください。

会員紹介に野村陽治さん寄稿文の中に「核のゴミを捨てる場所が地球上にはないのです。ロケットに乗せて太陽に突っ込ませるしかないと思います。」との記述がありました。このことは一部の研究家の間で検討されたことがあり可能性が僅かでもあることであればともかく、たんに野村さんの思い付きだとしたら、宇宙に放射能を拡散させるのではとの懸念があり無責任すぎることだと思います。如何でしょう。

2020年10月13日　札幌市厚別区　森田　雄一

【森田さんの意見に対する回答】

2020年10月21日

泊原発の廃炉をめざす札幌北区の会　　野村　陽治

これは、野村の思いつきでなく、結構いろいろな方が提案されています。

しかし、実現不可能な案です。

太陽は、表面温度が、6,000゜C、中心部の温度が1500万゜C、太陽を取り囲むコロナは、200万゜Cあります。

重元素の融点は、1,132゜C、沸点は、3,745゜Cです。核ゴミは完全に気化されます。気化された物質は、太陽の質量（重力）によって、外に飛び出す事はありません。

また、太陽中心では核融合により大変なエネルギーが「ガンマ線放射」という形で生み出されます。ガンマ線はエネルギーが強い電磁波なのでヒトが直接浴びると極めて有害ですが、太陽表面に向かう過程で膨大な太陽質量に阻まれ続けて周波数を減らし、ほぼ全てが紫外線や可視光線、赤外線に変わって太陽表面から放射されます。放射能をもつ様々な放射線も、同様に太陽の質量に阻まれます。

しかし、地球は太陽の廻りを秒速30ｋｍで公転しています。ロケットが強い推進力で、太陽の引力から脱出できたとしても、ちょうど、ひもにつけたボールをぐるぐる回して手を離せば、外に飛び出すように、秒速30ｋｍ（時速100,800ｋｍ）でぐるぐる回っている地球から、太陽とは逆方向に、遠くへ遠くへ飛ばされます。

ですから、秒速30kmを超える推進力が必要です。

ちなみに、人工衛星を軌道に乗せるためのロケットの速度（第一宇宙速度）は、秒速7.9ｋｍ　時速18,440ｋｍ。地球の引力や重力を振り切り、ロケットを宇宙にまで上げるためには、秒速11.2ｋｍ　時速40,320ｋｍです。

ロケットを太陽に運ぶ研究はNASAでも行われ、理論的には可能なのですが（詳細は省略）費用が膨大にかかり不可能との事。

野村は、今の人類が核を制御するのは不可能だという事を強調するため「太陽に突っ込ませる」としました。

会員紹介　山田　賢司 さん

現在の原発は、停止、廃炉に

私は学生時代、原子核反応により、膨大な熱エネルギーを得る事を学びました。同時に、使用済み核燃料（いわゆる核のごみ）が、残る事を知りました。

核物質は、医療においてはＭＲＩ核磁気共鳴）等に利用されていますが、原子力発電においては、核のごみが増え続けている状況です。現在の科学力では、このごみは「ゼロ」になるまで、待つ事しか方法がありません。

今、政府はガラス容器に混ぜて、地層処分を検討していますが、核のごみからの放射線が人体に害を及ばさない量になるまでに、10万年（半減期）かります。

日本の地層は不安定で、10万年保管できるところは発見できず、地層学者の調査も進んでいないのが現状です。地層状態が解明されるまで、地層処分は不可能です。又、「ガラス固化体」が10万年、地殻変動により破壊されない保障は立証不可能です。「負の遺産」を残す事より、地上にて保管し、放射能が減少するまで待つ事しか、方法がありません。

同時に、現在の原発は、停止廃炉にし、これ以上、核のごみは増やさない政策に転換すべきです。

核廃棄物は捨て場所のないゴミ-KHOS

ハイロ通信　編集局から

☆北区の会に入会して下さい

北区の会に入会しましょう。会費は年1口（千円）以上です。　申込は、下記に連絡ください。

HP https://hairo-kitaku.org/

メール hairo.kitaku@gmail.com

TEL(FAX) 011-726-7234

☆カンパをお願いします

北区の会・支援のカンパをお願いします。

【ゆうちょ銀行振込】

記号 19050　番号 55938131

【他銀行からの振込】

店名 908　口座番号 5593813

「口座名」泊原発の廃炉をめざす札幌北区の会

☆寄稿を歓迎します。どなたでも原発に関する発信を是非お願いします。連絡先は上記に。